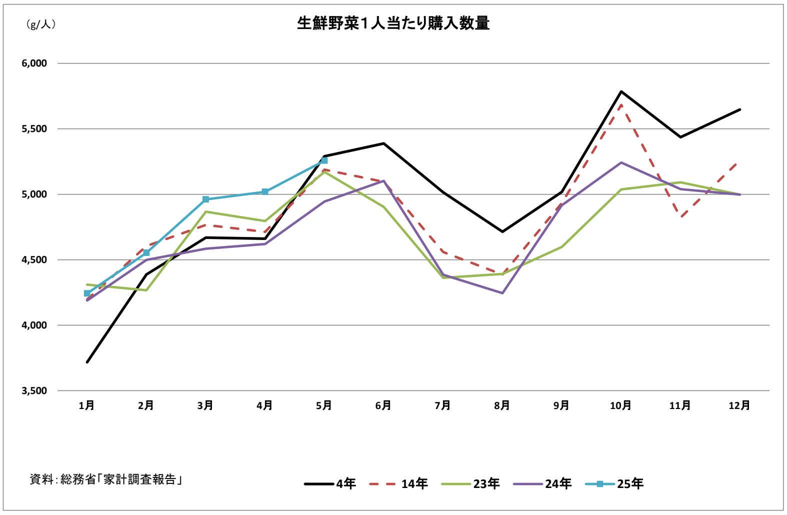
資料２－８

野菜の需給･価格をめぐる状況

1. 生鮮野菜の購入数量の推移

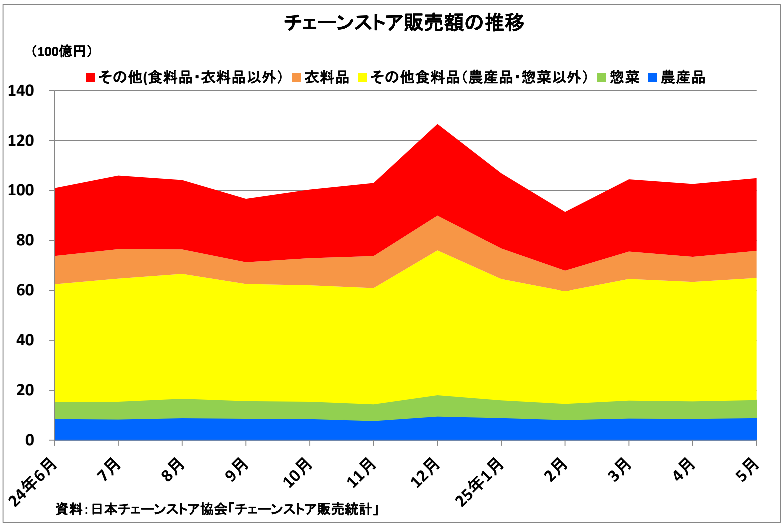


生鮮野菜の１人当たりの購入数量は、平成２４年７月以降、猛暑により需要が減少した８月、気温が高く鍋物用の消費が伸びなかった１１月及び前年並みであった１２月を除いて、前年を上回った。

平成２５年は、１月は、低温の影響により一部の品目で高値となったものの、前年を上回った。２月以降は、前年が高値の影響で購入量が少なかったことや、本年の生育が順調で総体的に安値となったことから、前年を上回った。

2. チェーンストアの販売動向

（1）販売額の推移

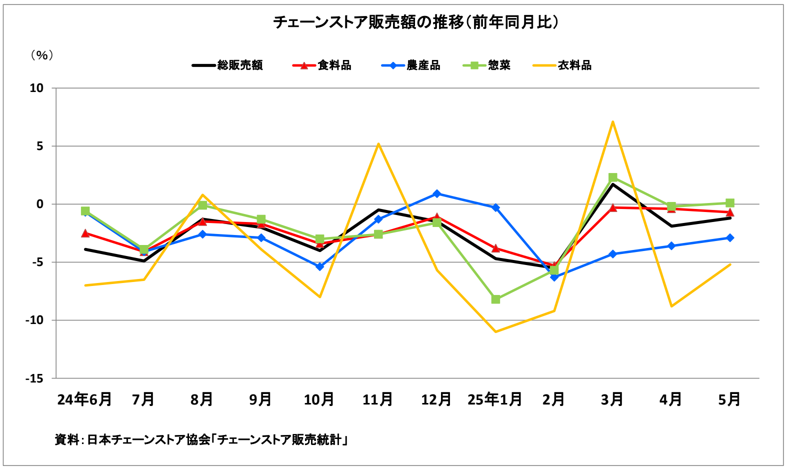


チェーンストアの直近１年間の総販売額の最高額は、１２月の１兆２，６６２億円、最低額は、２月の９，１４０億円であった。

そのうち、農産品の最高額は、１２月の９６２億円、最低額は、１１月の７８２億円であった。また、惣菜の最高額は、１２月の８３６億円、最低額は、２月の６３１億円であった。

農産品及び惣菜は、その他食料品に比べて月毎の変動が少なく推移した。

（2）販売額の前年同月比

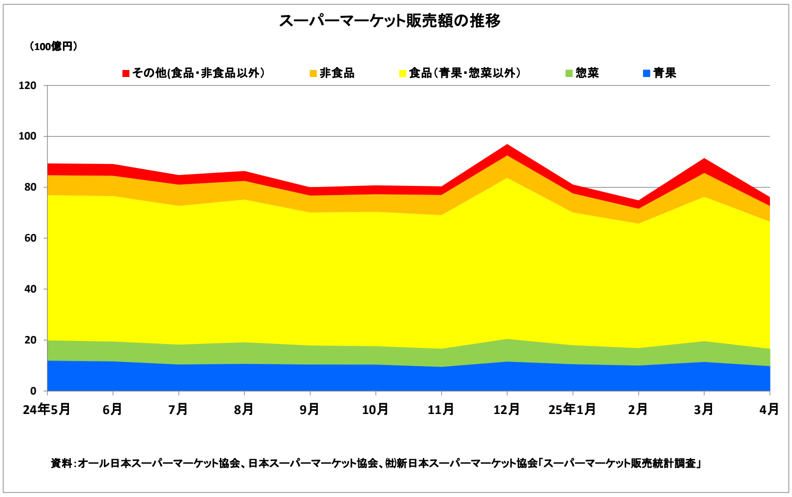


チェーンストアの直近１年間の総販売額は、３月を除き、１年を通じて前年を下回って推移した。

そのうち農産品は、鍋物需要のあった１２月を除き、前年を下回って推移した。惣菜は、前年を下回って推移し、特に、１月は、全品目で好調であった前年をかなり下回ったが、３月は、節句や花見需要があり、上回った。

3. スーパーマーケットの販売動向

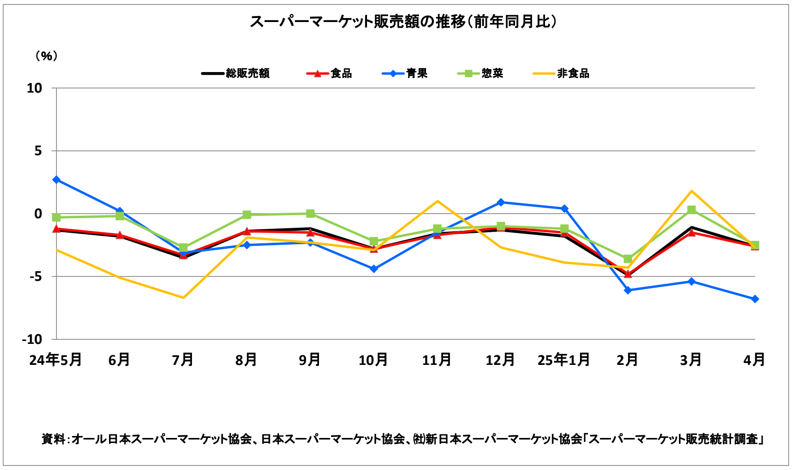
（1）販売額の推移



スーパーマーケットの直近１年間の総販売額の最高額は、１２月の９，７００億円、最低額は、２月の７，４８８億円であった。

そのうち、青果の最高額は、６月の１，１７６億円、最低額は、１１月の９６０億円であった。また、惣菜の最高額は、１２月の８７６億円、最低額は、４月の６６９億円であった。

（2）販売額の前年同月比



スーパーマーケットの直近１年間の総販売額は、５月以降、１年間を通じて前年を下回って推移した。

青果は、７月以降、１２月及び１月を除き、前年を下回って推移した。惣菜は、３月を除き、前年並み又は前年を下回って推移した。

４. カット野菜の小売動向について

～野菜の需給価格動向レポート（平成２５年５月８日版）より～

平成21～24年度の量販店等におけるカット野菜のPOS（販売時点情報管理）データから、近年需要の伸びが注目されているカット野菜の小売動向を探ってみた。

メーカー数及びアイテム数は、平成24年度に大きく増加している。一方、千人当たりの販売個数と販売金額は、年を追うごとに大きく増加している。

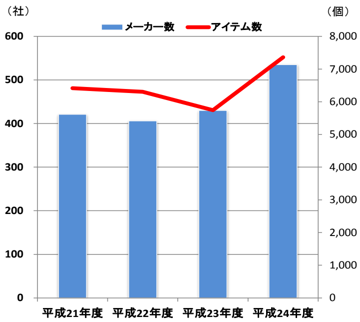
そうした中、主な品目の平均価格の推移を見ると、みずなとレタスは上昇傾向であるものの、全体的には価格がやや下がる傾向にある。

また、千人当たりの販売金額の品目別の比率を見ると、平成24年度では、ミックス野菜が一番高く、次いで、キャベツ、レタス、みずなの順になっており、平成21年度と比較すると、ミックス野菜及びごぼうの比率が低くなり、キャベツ、レタス及びみずなの比率が高くなっている。

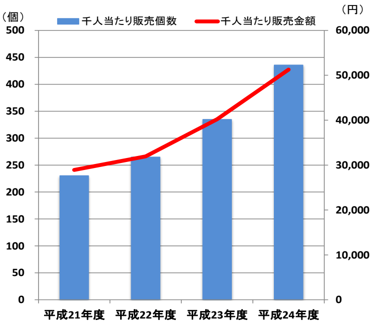
カット野菜は、これまで生鮮野菜の価格が高い時に代替品として販売が伸びると言われていた。カット野菜の販売個数と生鮮野菜の卸売価格の推移を見ると、平成23年ぐらいまではそのことが当てはまる。

しかし、平成24年以降は、卸売価格の高騰にあわせてカット野菜の販売個数の水準が上がり、かつ、卸売価格が下落しても販売個数はそれ程減少していない。簡便化志向の中で使いきりのできるカット野菜の利便性を知り、カット野菜の利用が定着して、需要が拡大していると最近言われるようになったが、そのことが十分に伺える推移となっている。

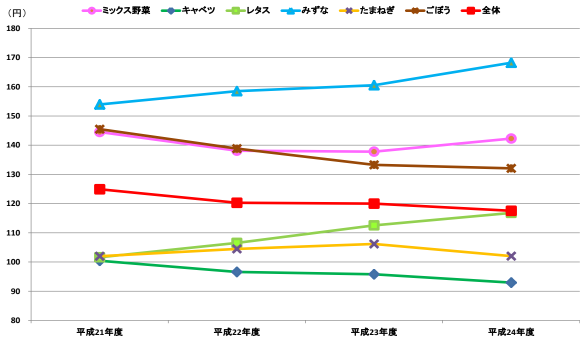
カット野菜のメーカー数とアイテム数の推移



カット野菜の千人当たりの販売個数と金額の推移



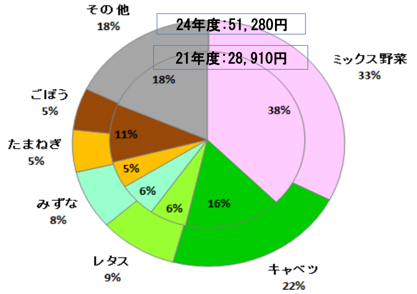
カット野菜の主な品目の平均価格の推移（平成21～24年度）



資料：農畜産業振興機構「カット野菜小売販売動向調査」
注：平均価格は、品目別又は全体の販売金額を販売個数で除したものである。

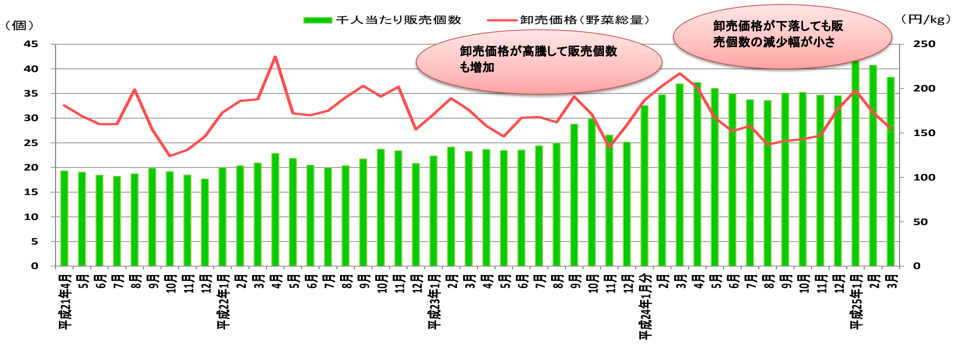
資料：農畜産業振興機構「カット野菜小売販売動向調査」

カット野菜の千人当たりの販売金額品の品目別の比率
（平成21年度と24年度の比較）



資料：農畜産業振興機構「カット野菜小売販売動向調査」

カット野菜の千人当たりの販売個数と生鮮野菜の価格の月別推移（平成21～24年度）



資料：農畜産業振興機構「カット野菜小売販売動向調査」、青果物情報センター
注：卸売価格は、東京都中央卸売市場の野菜総量の卸売価格。

注：１. カット野菜小売動向調査におけるカット野菜は、スーパー等の生鮮野菜の売り場や総菜売り場で販売されているカット野菜(きざみ野菜、ミックス野菜及び葉もの中心のサラダを含む。)と調理用カット野菜(鍋セット、野菜炒めセット及びつまものセット)である。ただし、2分の1カットや4分の1カット等単価の逓減等のためにカットした野菜を除く。
２ 収集POSデータは、日経POSデータであり、全国のスーパーマーケット（約156チェーン、約683店舗）を対象としている。
3.「サラダ」のカテゴリーに属するPOSデータと「その他農産」のカテゴリーに属するPOSデータを収集し、野菜中心のサラダと調理用野菜を抽出した。
4. 品目別データの抽出に当たっては、商品名の最初にくる品目名をキーワードとして、品目別に抽出し、品目別に分類できないものはミックス野菜としている。

5. 野菜の小売価格について

～野菜の需給価格動向レポート（平成25年7月1日版）より～

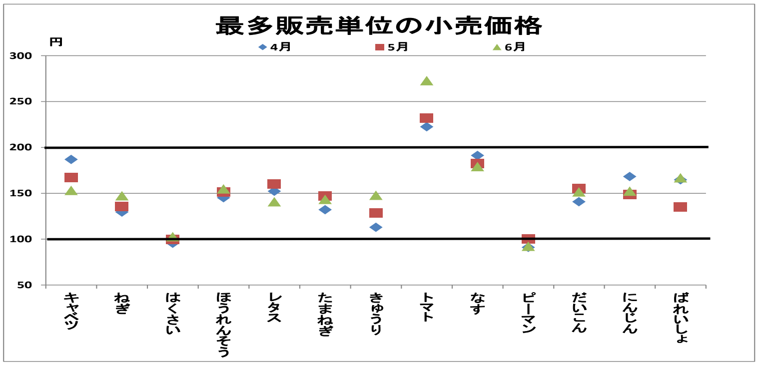
本年4月から主要9都市における野菜の小売価格の調査を行っており、6月までの3か月の動向について見てみた。

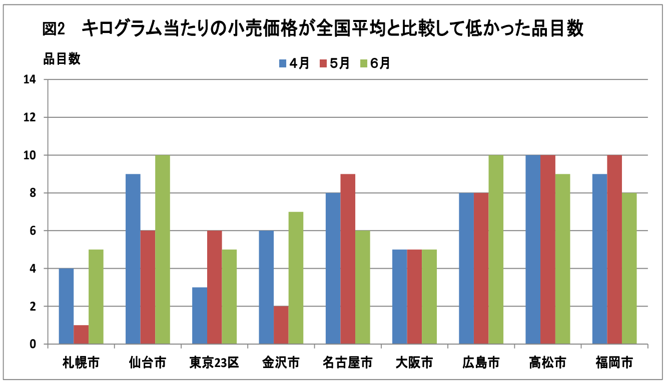
最多販売単位の小売価格は、トマト以外の野菜は、おおむね100～200円の範囲内にあった。野菜は、調理の素材として利用されることが多いが、値頃感がおおむね100円台に設定されていることがわかる。一方、トマトは、200円台で販売されており、他の野菜よりも高く販売されている。

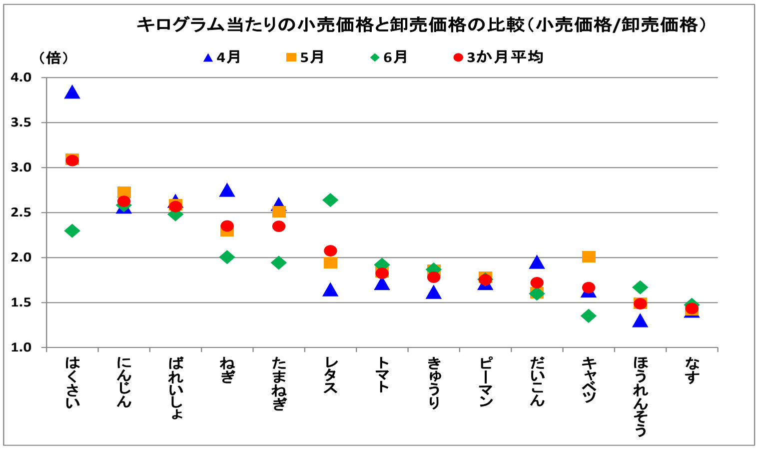
また、主要9都市のキログラム当たりの小売価格を全国平均と比較すると、名古屋、広島、高松、福岡等が全国より低い品目が多い傾向が見られるが、この時期の産地が東海や西日本に多いことも一因ではないかと考えられる。

なお、キログラム当たりの小売価格を同時期の卸売価格で除して比較すると、この3か月間では、はくさいが一番倍率が高く、次いで、にんじん、ばれいしょの順となっている。一方、なすやほうれんそうは、低くなっている。また、変動が大きいのは、はくさい、レタス、キャベツ等の葉茎菜類で、なす、ピーマン等の果菜類、ばれいしょ、にんじん等は変動が小さい状況が見られる。これは、販売単位ごとの小売価格を値頃感のある範囲に納める必要がある中で、どちらかというと葉茎菜類は販売単位の変更がしにくいものの、果菜類等は販売単位の変更がしやすいことも影響しているものと考えられる。

野菜の小売価格については、今後も引き続き調査することとしており、いろいろな場面で活用していただきたい。

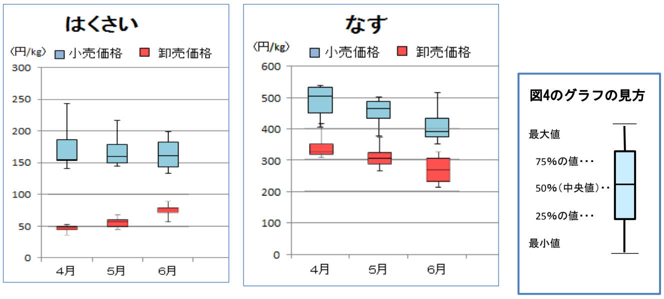






資料：農畜産業振興機構「野菜小売価格動向調査」、農林水産省「青果物日別取扱高結果」

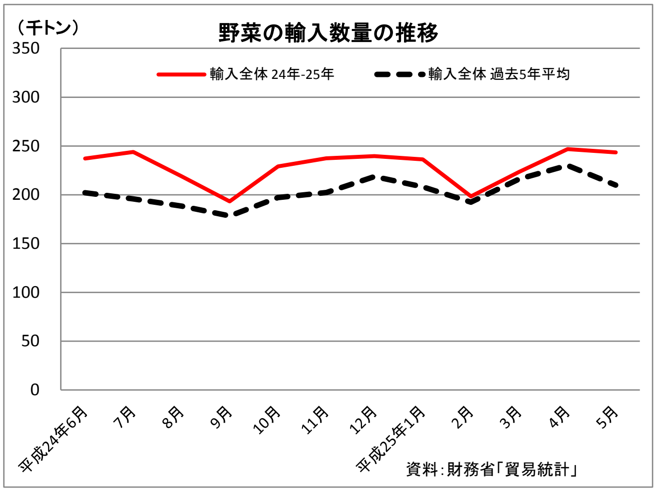
図4 主要都市の小売価格と卸売価格の変動



（注）
1 札幌市、仙台市、東京23区、金沢市、名古屋市、大阪市、広島市、高松市、福岡市の9都市で、月1回（原則として毎月第2金曜日）、調査を実施。1都市について、10店舗調査 。調査品目は、さといもを除く指定野菜13品目。
2 「最多販売単位の小売価格」は、品目ごとに1店舗につき一番販売面積が広いと報告された販売単位の小売価格で、図1は品目ごとにの平均値をグラフにした。
3 「キログラム当たりの小売価格」は、1店舗につき1つ報告されたkg当たりの価格の平均値。
4 図3で使用した「卸売価格」は、全国の主要な中央卸売市場（10市場）の卸売価格の平均値で、図4の「卸売価格」は、調査都市にある中央卸売市場の調査日が属する旬の卸売価格。
5 図4は、はくさい及びなすの9都市の小売価格及び卸売価格のバラツキをグラフにした。

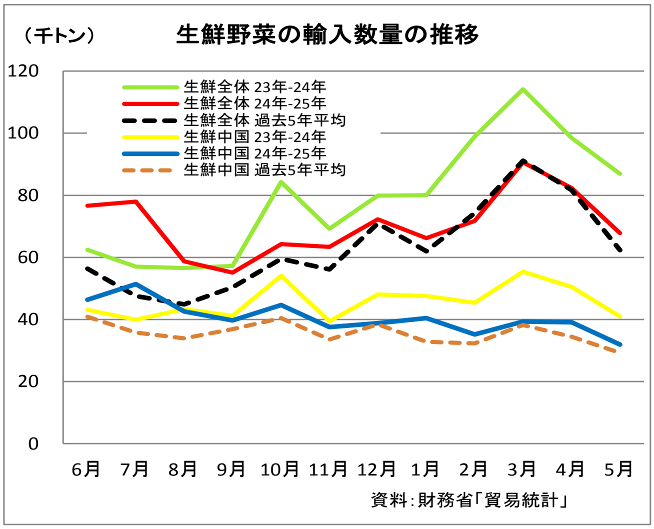
6. 野菜の輸入動向

(1)野菜全体の輸入数量



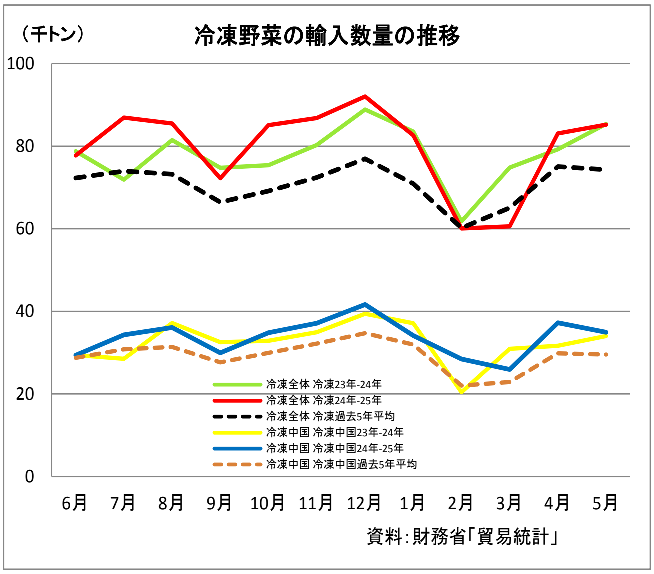
野菜の輸入数量は、全期間を通じて過去５年平均を上回った。
１１月から１月にかけて、低温等による国内産の供給不足により、葉茎菜類を中心に輸入野菜の需要が高まった。２月は、生鮮野菜の４割近くを占めるたまねぎの輸入量が中国産の不作等により前年比６１%、前年、国内産が不作で輸入量が多かった結球キャベツとブロッコリーがそれぞれ同４７%、５０%と大幅に減少したこともあり、輸入数量は、２００千トンを下回った。
４月以降は、冷凍野菜の輸入が高水準だったことから、２４０千トンを超える輸入数量となった。

(2)生鮮野菜の輸入数量



生鮮野菜の輸入数量は、６月から８月までは、府県産たまねぎの不作から、前年を上回って推移した。９月以降、国内産の生育が回復したことに加え、中国産たまねぎの不作や円安の影響で一部の品目を除き輸入単価が上昇したことから、９か月連続で前年を下回った。
中国産の輸入数量は、全期間を通じて過去５年平均を上回った。９月以降は、北海道産たまねぎが豊作であったこと、中国産たまねぎの不作や中国産野菜の値上がりの影響もあり、前年を下回った。

(3)冷凍野菜の輸入数量



冷凍野菜の輸入数量は、2月及び3月を除き、過去5年平均を上回った。
2月及び3月は、米国産ばれいしょの輸入数量が大幅に減少したため、2月は前年並みとなり、3月は前年を下回った。
中国産の輸入数量は、全期間を通じて、過去5年平均を上回った。

(4)主要品目の輸入数量(平成24年1月～12月)

生鮮野菜(トン)	
①たまねぎ	342,293
②かぼちゃ	125,024
③にんじん・かぶ	82,951
④ねぎ	52,163
⑤ブッロコリー	49,735

冷凍野菜(トン)	
①ばれいしょ	385,554
②えだまめ	70,856
③スイートコーン	48,607
④さといも	39,429
⑤ブロッコリー	36,059

資料:財務省「貿易統計」

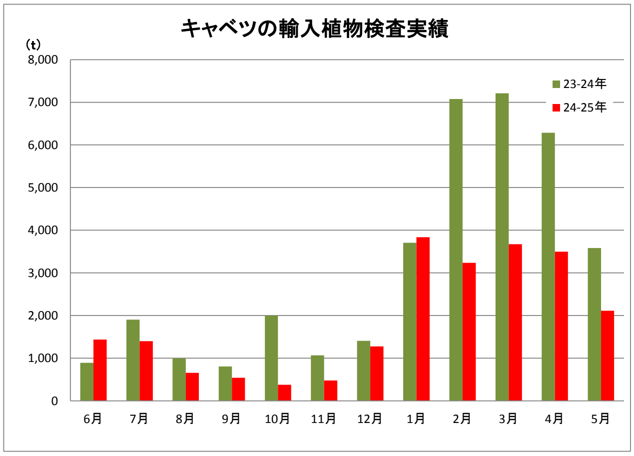
(5)主要品目の植物防疫検査実績

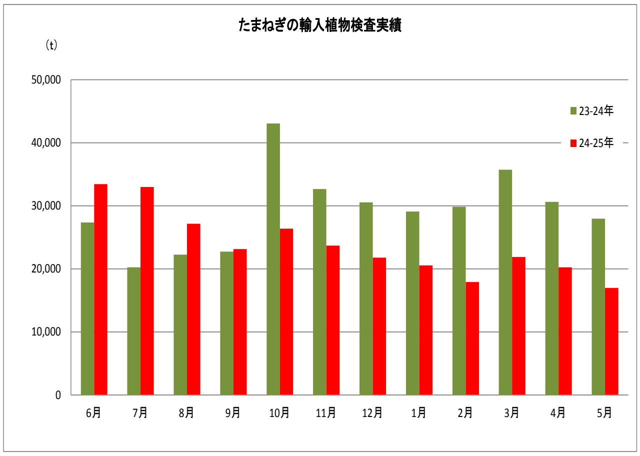
キャベツの輸入検査実績は、一部の産地で雹害が発生した影響から、6月は増加した。7月以降は、国内産が順調に出荷されたため、レタス高騰による代替需要が発生した1月を除き、前年を下回って推移した。

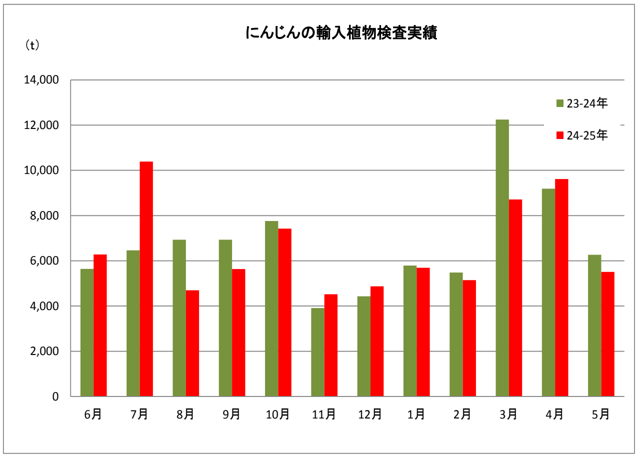
たまねぎは、府県産が供給不足であったため、9月までは前年を上回って推移した。10月以降は、豊作であった北海道産が本格的に出荷されたことに加えて、中国産の不作や輸入価格の上昇もあり、前年を下回って推移した。

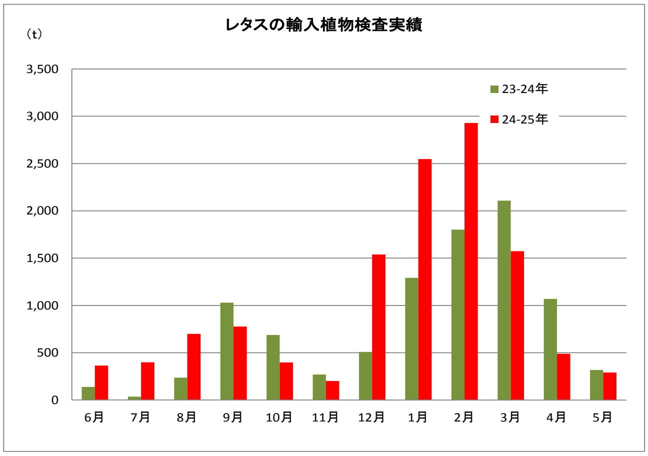
にんじんは、7月は、北海道産が残雪による定植作業の遅れの影響から出荷が少なくなったこと等により、前年を大幅に上回った。8月以降は、低温等による国内産の供給不足の影響を受け、前年を上回った11月、12月及び4月を除き、下回って推移した。

レタスは、12月から2月までは、主産地の低温等の影響で、前年を大幅に上回った。3月以降は、前年が低温・少雨であったことから、下回った。









※品目によって縦軸の数量の数値に大小があるのでご注意ください。

資料:農畜産業振興機構「ベジ探」

原資料:農林水産省「植物検疫統計」